

乳児院で働く保育士の専門性に関する研究(1) —質問紙の自由記述にみる施設保育士の役割についての考察—

山下 愛実 小川 愛寧*

要約

「保育士」として働く場所は多岐にわたる。保育所で働く保育士の専門性に関する知見が重ねられてきている一方で、乳児院で働く保育士の専門性については十分に検討されていない。そこで本研究は、乳児院における保育士と子どもとの関わりを明らかにし、乳児院の特性を踏まえて保育士の役割・使命を考察することとした。A乳児院で働く保育士への質問紙調査を実施し、自由記述欄に記載された内容について内容分析を行なった。その結果、乳児院で働く保育士は、①子どもたちと日常生活を共にしながら子どもが安心して自分を発揮できる関係性の中で育っていけるよう援助していること、②子どもたちが集団で生活することや職員に勤務時間があることが子どもとの関わりで生じる難しさの一つの要因となっていたが、その背景には子ども一人一人の特性を把握して個別に関わることを重視し、関係性の構築を志向することがあることが明らかになった。乳児院で働く保育士には、乳児院で共に働く職員とともに、子どもの人権を護るために子どもが一人の人として愛されること、子どもの存在そのものを愛をもって受け入れることが求められていることが見いだされた。

キーワード：施設保育士，乳児院，専門性，保育実践，自由記述

1. 問題と目的

「保育士」資格は、「児童福祉法」にもとづく国家資格であり、「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」(児童福祉法第18条第4項)を指す。「保育士資格」の前身の「保母資格」においては「児童福祉施設において、児童の保育に従事する女子を保母」というと規定されていたものの(児童福祉法 昭和23年施行令第13条)、平成15年の児童福祉法の改正により、名称独占資格として規定され国家資格となるとともに、「児童福祉施設」という文言は削除された。それゆえに近年、保育士資格を用いた専門的実践の場は多岐にわたっており、保育所や児童養護施設、児童発達支援センター、障害児入所施設等の児童福祉施設をはじめ、医療機関に入院中の子どもの保育に携わる場合もある。このように「保育士」の役割には、幼児教育・保育現場における保育を必要とする子どもの保育に加えて、保護者のもとを離れて生活をする子どもや障害のある子ども、片親家庭で生活する子ども、病気を抱え治療中の子どもなど、さまざまな背景や特性を持つ子どもたちの保育を専門家として担うことが含まれている。

指定保育士養成施設卒業者(保育士資格取得者)の就職先の割合を示した資料(厚生労働省2020)によると、平成30年度では、「保育所及び幼保連携型認定こども園」への就職が全体のうち(総数39,909名)、約60%の23,216名を占め、「保育所及び幼保連携型認定こども園以外の児童福祉施設」への就職の割合は3.5%の1,416名と低い割合にとどまっている。このように、保育者養成校で学んだ多くの学

生は、保育所等の幼児教育・保育現場で子どもの育ちに携わることとなる。それゆえに、従来、「保育者の専門性」に関しては、保育所等の幼児教育・保育現場における保育者に限定した形で、様々な知見が積み上げられてきている。例えば、保育士養成校の立場から現場でどのような養成が求められるのかについて検討したものや（林・森本・東村 2012；山田 2014）、現場で働く保育者を対象にした省察や保育カンファレンスの実施等に見る実践力の向上を検討したもの（平山 1995；中西・境・中坪 2013）等が挙げられる。また、これらの多様な視点から得られた知見に基づき、現行の保育所保育指針には、保育士は「保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものであり、その職務を遂行するための専門性の向上に絶えず努めなければならない」とある。このように、保育現場で働く保育士の子どもの関わりで見られる専門性には、「きめ細やかな内面の理解、子どもの発達や学びをつなぐ確かな援助」があるという（神長 2015）。

一方で、病棟で働く保育者の専門性については、幼児教育・保育現場で働く保育者の専門性とは異なる点が見いだされてきている。山田・林・高橋・石田（2009）は、「病棟保育士」へのインタビューを行い、「（病棟）保育士の役割は、他の医療スタッフと協働し、子どもが育つ権利保障に重きをおく観点から、入院中の子どもの生活を豊かにする活動を計画し実践することである」と述べている。また、臨床の現場で共に働く看護師が病棟保育士の専門性をどのように捉えているのかについて、インタビューをもとに検討した穂高（2013）は、「子どもの視点や気持ちを理解」といった子どもの理解や「子どもが活動の主役になるように支援する」といった「子どもが生活の主体になること」の支援等に加えて、「母親に近い立場にいる」ことや「家族にとって話しやすい」といった「家族が安心して過ごせるように支援する」ことも病棟保育士の専門性として挙げられることを明らかにしている。小児医療の現場において、小児がんの子どもが苦痛の強い検査を受ける前から終了するまでの過程を観察し、「頑張れ」という言葉がどのように使われているのかに着目した大西（2010）によると、医療者や親は子どもが感じている痛みに関心ではいられず、巻き込まれながら痛みの渦中にある子どもに身を重ねるようにして言葉をかけていたことを明らかにしている。すなわち、病気の治療という苦しみの渦中にある子どもに寄り添い、子どもの心を支える役割を病棟保育士は大きく担っていると考えられる。

保育所や幼保連携型認定こども園等の幼児教育・保育現場では、開所時間や閉所時間、休園日があり、保育者は子どもが登園しているあいだの保育を担う。また病棟保育士は入院しているあいだの子どもたちに寄り添う。しかし、乳児院や児童養護施設で働く保育士は施設で日常生活をおくる子どもたちと共に生活する役割を担う。

乳児院は、「乳児（保健上、安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合には、幼児を含む。）を入院させ、これを養育し、あわせて退院した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設（児童福祉法第 37 条）」である。近年、小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）や里親といった「家庭と同様の養育環境」の推進が図られているが、社会的養護を必要とする児童の約 9 割が施設に入所している現状があるという（厚生労働省 2021）。ただし、施設においても施設の小規模化が進められてきている。厚生労働省（2021）によると、令和 2 年 3 月末時点で乳児院に入所する児童数は 2,760 人となっており、過去 10 年間で 1 割減少している。その一方で、乳児院の設置数は平成 21 年 10 月時点で 123 か所であったものの現在は 144 か所まで増加していることから、

乳児院で働く保育士の専門性に関する研究（1）
—質問紙の自由記述にみる施設保育士の役割についての考察—

一般家庭に近い生活を子どもたちが体験できるよう、乳児院においても少人数で過ごすことが推進されていることがわかる。

このように、施設の小規模化が推進され、それに伴い、実際に乳児院で働く保育士の経験内容も変容していき、と考えられるものの施設保育士の専門性についてはこれまでほとんど光が当てられてきていない。また、アタッチメントの重要性が指摘されているものの、子どもとの具体的な関わりでどのような専門性を要するのかに関しては十分に検討されてきていない。そこで本稿では、乳児院における保育士と子どもとの関わりを明らかにし、乳児院の特性を踏まえて保育士の役割・使命を考察することを目的とする。

2. 方法

(1) 質問紙調査の概要

A 乳児院に勤める保育士（12名）への質問紙調査を行った。子どもとの関わりで感じた喜び、子どもとの関わりで感じた難しさ、乳児院で働く施設保育士として大切にしていること等について自由記述による回答を求めた。質問紙調査の送付から回収までの期間は、202X年6月から7月であった。

(2) 分析方法

質問紙調査の自由記述について、質的な意味をもとに一記録単位とし、カテゴリ生成を行った。カテゴリの生成後、自由記述をカテゴリごとに分類した。

(3) 倫理的配慮

本研究は、宮崎国際大学教育学部倫理審査委員会による承認を得て行われた。個人情報とプライバシーの保護に留意し、個人が特定されることのないよう、ID番号で管理した。

3. 結果と考察

自由記述により得られた内容について、質問事項に沿って(1)子どもとの関わりで感じた喜び、(2)子どもとの関わりで感じた難しさ、(3)乳児院で働く施設保育士として心掛けていること、の3点について順に挙げる。

(1) 子どもとの関わりで感じた喜び

「子どもとの関わりで感じた喜び」についての内容を分析したところ、①子どもの成長、②子どもの自発性、③子どもの笑顔、④子どもとの情動共有、⑤その他、の5点が見出された（表1）。以下に、特徴的な記述内容を提示し、考察を行う。なお、キーワードとなる部分は下線で表記した。

表1 子どもとの関わりで感じた喜び

子どもとの関わりで感じた喜び	事例数
子どもの成長	12
子どもの自発性	9
子どもの笑顔	6
子どもとの情動共有	3
その他	1

①子どもの成長

日々の成長です。進んでは戻るを繰り返しながら少しずつでも成長を感じられたときに喜びを感じます。

初めての寝返り、這い這い、立つ、歩くなどの発達やお誕生日などの行事で成長が見られたとき。

今までできなかったこと（言葉が言えるようになった、着脱ができるようになった、排泄できるようになった等）ができるようになったときは喜びを感じます。

②子どもの自発性

ほとんど発信のなかった児が関わりを重ねることでしっかりと大人を信頼して、自我・要求を他者に発信できるようになってきたこと。イヤイヤ期や反抗期、日常でも、日々試行錯誤で反省を繰り返しますが、しっかりと向き合う、しっかりと一緒に遊ぶほど、関係性が少しずつ築けてきたと感じられるとき。また、私を求めて名前を呼んでくれるようになったときなどは、とても嬉しくこの仕事のやりがい強く感じます。

抱っこしてくれれば誰でもいい、というような状態から、担当保育者がいい、信頼している保育者がいい、とはっきり示すようになったとき。

子どもたちから名前を呼んでくれたり関わりを求めてきてくれたりしたときには喜びを感じます。

③子どもの笑顔

子どもの満面の笑みを見たとき

一緒にお出かけしたり、お泊まりして子どものたくさんの笑顔が見れたとき

④子どもとの情動共有

担当保育者として担当児と気持ちが通じ合えたと感じられたとき

「子どもとの関わりで感じた喜び」については、「できなかったことができるようになった」という日常生活の中での子どもの成長・発達、保育者との信頼関係が築かれるプロセスで「自我・要求を他者に発信」する様子が見られるようになること、日常を共に過ごす中で子どもと笑顔を共にできること、気持ちが通じ合えたと感じる経験が挙げられた。

乳児院は、主に0歳から2歳までの子どもが生活する場所であり、この時期の子どもたちは人格形成の基礎が築かれる時期にある。また、子どもが自発性を発揮することは、人や物との関係性の中で自ら育っていくことにつながっていく。これらの点を踏まえると施設保育士は、人格形成の基礎を築く時期に、子どもたちと日常生活を共に過ごしながらか、子どもが安心して自己を発揮できる関係性を構築し、その安定した関係性の中で子どもが自身の持つ育つ力を発揮できるよう援助していると考えられる。

乳児院で働く保育士の専門性に関する研究（1）
 ー質問紙の自由記述にみる施設保育士の役割についての考察ー

(2) 子どもとの関わりで感じた難しさ

「子どもとの関わりで感じた難しさ」についての内容を分析したところ、①集団生活の中での個別の関わり、②子どもの特性の把握、特性に応じた個別の関わり、③担当児との関わり、④時間の制限、⑤非言語コミュニケーションに関する内容、⑥その他の6点が見出された（表2）。以下に、特徴的な記述内容を提示し、考察を行う。なお、キーワードとなる部分は下線で表記した。

①集団生活の中での個別の関わり

様々な特性・背景の子どもたちに家庭的保育を施設という集団の中で行なうことの難しさ

集団生活の中で「異なる一人ひとりの発達段階に応じる」ことの難しさを感じます。

②子どもの特性の把握、特性に応じた個別の関わり

私たちの関わりにより、成長を阻害することがあってはならないと思うと、責任は重大です。発達について知らなくてははいけません。

特性の異なる子どもたちがたくさんいて、一人ひとりをしっかりと把握して対応していかななくてははいけない。

③担当児との関わり

担当児ともっと関わってあげたいと思っても他児もいるため十分に満たしてあげられないなど感じる時。

「子どもたちみんなの保育士」と「担当児だけの保育士」とのバランスの難しさ。

④時間の制限

勤務時間という縛り、日勤・夜勤という変則勤務の中で愛着関係を築く難しさ

子どもとの直接的な関わり以外の業務もあつたり、交替制勤務であつたり、（…略…）そういったなかで愛着関係を築いたり深めていくこと。

⑤非言語コミュニケーションに関する内容

思いが言葉にならない年齢の子どもたちが多いため、気持ちをくみ取りながら関わる難しさ。

表2 子どもとの関わりで感じた難しさ

子どもとの関わりで感じた難しさ	事例数
集団生活の中での個別の関わり	8
子どもの特性の把握、特性に応じた個別の関わり	5
担当児との関わり	4
時間の制限	4
非言語コミュニケーションに関する内容	3
その他	6

「子どもとの関わりで感じた難しさ」については、集団生活の中で子ども一人ひとりに応じること、一人ひとりの特性を把握し、その特性に応じて個別に関わることや「みんなの保育者」でありつつも「担当児だけの保育者」でもあることのバランス、勤務時間という制約や子どもと直接的に関わることの他にも業務がある中で、子どもと関係性を築くことの難しさ、言語獲得以前の子どもの気持ちを汲み取ることの難しさが挙げられた。これらの難しさに共通することとして、一人ひとりの特性に応じた個別の関わりを重視することや、担当児を中心に一人ひとりの子どもと関係性を築くことを目指すものの、集団での生活や勤務時間があるといった障壁に直面することで難しさが生じていることがある。しかし、そのような中でも、子どもに笑顔が見られたり、特定の大人を強く求めるといったように、その子どもにとっての喜びが生まれる時間を共にできたり、その子にとっての安心できる世界がつくられ、関係性の構築へとつながるときに、抱えていた「難しさ」は「喜び」へと変わっていくことがあると考えられる。

(3) 施設保育士として大切にしていること

「施設保育士として大切にしていること」についての内容を分析したところ、①子どもが愛されている、大切にされている気持ちを感じる、②子どもと向き合い、子どもを受け入れ、認める、③異職種の職員とのチームワークを大切にすること、④子どもが家庭と同じような経験ができる、⑤子どもと一緒に楽しむ、笑い合う、⑥一人ひとりの背景を把握する、⑦保育士という専門職の立場で働く意義を忘れない、⑧その他、の8点が見出された(表3)。以下に、特徴的な記述内容を提示し、考察を行う。なお、キーワードとなる部分は下線で表記した。

①子どもが愛されている、大切にされている気持ちを感じる

子どもの気持ちに寄り添い、全受容し、大切にされていると感じられる経験を積み重ねていくこと

子どもたち自身が自分を大事にできるように、大切に思っているということを意識して伝えている。

個別での関わりをする中で、愛されている、大事にされているという安心感が持てるようにしたいと思っています。

表3 施設保育士として大切にしていること

施設保育士として大切にしていること	事例数
子どもが愛されている、大切にされている気持ちを感じる	6
子どもと向き合い、子どもを受け入れ、認める	5
異職種の職員とのチームワークを大切にすること	4
子どもが家庭と同じような経験ができる	3
子どもと一緒に楽しむ、笑い合う	1
一人ひとりの背景を把握する	1
保育士という専門職の立場で働く意義を忘れない	1
その他	6

乳児院で働く保育士の専門性に関する研究（1）
—質問紙の自由記述にみる施設保育士の役割についての考察—

みんな一人ひとりが愛されているということを実感できるように丁寧に関わっていきたいと思っている。

②子どもと向き合い、子どもを受け入れ、認める

子どもたちの想いを受け止め、尊重しながら関わること

どんなときでも愛情をもって接すること。子どもの行動の意味を考え、認めてあげられるように（…略…）する。

③異職種の職員とのチームワークを大切にす

自分一人で子どもを見ているのではなく、様々な専門職や知識や経験のある職員と一緒に働いているため、自分だけの視点に凝り固まることなく、柔軟な発想で子どもの姿を捉えられる保育士でいたい。

職員みんなで子どもの成長を喜び合えるよう、日々のコミュニケーションをしっかりと取ること

自分のこういう保育をしたいという信念を持つことも大切だが、他の職員とのチームワークなので先輩職員の意見に耳を傾けたり、新卒の職員も新しい意見が聞けると思うのでどんな人の意見も聞きつつ自分の意見と交え、よりよい保育ができるようにしたいと思っている。

④子どもが家庭と同じような経験ができる

子どもたちが家庭で過ごすように、大人と一緒に食事をしたり、お風呂に入ったり、お出かけをしたり、感情を素直に出したり…という経験をしながら、大人との信頼関係を築き、子どもたちが年を重ねたときに、自分は一人の人間として大切にされてきたんだと感じられるようにしていきたい。

家庭であれば当たり前にあることも、こうした施設ではその当たり前がなかなか難しく、経験できないことも多々あります。「家庭的な」といった面でも、そうしたところを少しでも体験できるように、経験を重ねられるように、個別やお出かけ、お泊まり等、方法を考えて機会を設けることはこれからも継続し、大切にしていきたいと思っています。

⑤子どもと一緒に楽しむ、笑い合う

“たかいたかい”や馬になって子どもを背中に乗せる遊びなどたくさん体を使って子どもと一緒に楽しむ、声を出して笑い合うことを心がけてやっている。

⑥一人ひとりの背景を把握する

その子の背景、家庭環境や特性などを踏まえながら一人ひとりに関わること。

⑦保育士という専門職の立場で働く意義を忘れない

私たちは親の代わりに子どもたちを育てているが、親にはなりえない。あくまで仕事として、客観的に冷静

に子どもたちのことを観察すること。その上で愛情深く関わることを個人的に大切にしている。保育士という専門職として働く意義を忘れないようにしたい。

「施設保育士として大切にしていること」については、子どもの気持ちに寄り添い、全受容することや、大切な存在であることを伝えること、子どもが家庭で過ごす中で得られることと同じ経験を得られるようにすること、職員全体で子どもの育ちを支えること、一人ひとりの背景を把握し、その特性に応じた関わりができるようにすることが挙げられる。「子どもと向き合い、受け入れる」ことや「家庭と同じような経験ができる」こと、「子どもと一緒に楽しむ、笑い合う」といった点は、「愛されている、大切にされているという気持ちを感じる」ことに通じていることから、目の前にいる子どもの存在そのものを認め、愛していくことが施設で働く保育士にはより強く求められていると考えられる。また保育所とは異なり、乳児院には保育士、公認心理師、看護師、栄養士等の様々な専門職が置かれ、共に子どもたちの育ちを支えていく。公認心理師には発達・心理的な立場からの専門的関わりがあり、保育士には保育や養護、福祉の立場からの専門的関わりが求められる。近年、児童福祉施設における人員配置基準が見直されるとともに、施設の小規模化が進められ、保育士一人当たりの子どもの人数も減ってきている。そのような中で、特定の大人と子どもとの間で関係が構築されることを重視しつつも、子どもの育ちについて専門性を異にする職員全体で共有し、支えていくことが保育の質の向上とともに、子どものより豊かな育ちにつながっていくと考えられる。すなわち、施設保育士の役割として、専門性を異にする職員全体で目の前にいる子どもの生きている存在価値を感じ、尊重し、子どもにとっての最善を保障することを意識する中で、施設で生活する子どものより豊かな育ちを志向することがあると考えられる。

4. 総合考察

保育所には開所時間と閉所時間とがあり、保育を必要とする子どもたちが開所時間のあいだに家庭等から集ってくる。それに対して、乳児院は子どもたちにとっての日常の生活場所である。その大切な場所で、保育士は子どもの日常に関わりながら、愛情を基盤にして一人ひとりの育つ力に寄り添い、育つ力を引き出す援助をする。「乳児院で働く保育士として大切にしたいと思っていること」に関する項目（「その他」に該当）に、以下のような回答があった。

「子どもたちにとって乳児院（児童養護施設も含め）は“生活の場”ですが、私たちにとっては“仕事の場”です。そのギャップをどう埋めていくか、それが子どもの人権を護ることに繋がると思っています。人が人として人らしく育つ環境（＝“家庭”に近い環境）にしたいというのが長年の目標です」

「保育園では、保育士が子どもたちを『おはよう』と迎え、『さようなら』と送り出す。乳児院では、子どもたちが私たちを『おはよう』と迎え、『おやすみ』と送り出す。乳児院は子どもたちの生活の場であり、大切な居場所である。子どもたちの衣食住を整え、体調管理を行なう責任が私たちに大きくあることを常に頭に置きながら、子どもたちがよりよい生活を送り、安心安全に過ごせるための努力を怠らないようにしていきたい」

近年、保育士が働く場所は多岐にわたっている。同じ「保育士」という資格を持って働くとしても、働く場所によって、そこで必要とされる専門性は大きく異なる。先の保育士の言葉にあるように、保

乳児院で働く保育士の専門性に関する研究（1）
—質問紙の自由記述にみる施設保育士の役割についての考察—

育所では保育士が子どもたちを迎え、送り出す。それに対して、乳児院では子どもたちが職員を迎え、送り出す。子どもたちにとっての大切な生活の場所であり、職員が子どもたちに愛を伝えていく場所でもある。乳児院は、子どもの人権を護るための機能を持ち、それを支えていくのが保育士をはじめ、その場所で共に働く職員である。一人の人として愛されること、「生きていてくれてありがとう」というその子どもの存在そのものを愛をもって受け入れることが、乳児院で働く保育士の専門性の一つに挙げられると考えられる。

5. 今後の課題

自由記述には「子ども一人ひとり」という言葉が多く見られた。この点は、現行の保育所保育指針においても重視されている視点である。しかしながら、「子ども一人ひとり」という言葉に含まれる意味合いや実際の個別具体的な関わりは、施設保育士と保育所で働く保育士とは異なると考えられる。そこで、今後はインタビューを実施し、子どもとの関わりで発揮される専門性の内実をより具体的に検討する。

* 宮崎国際大学教育学部学部生

謝辞

本研究の質問紙調査にご協力いただきました、A 乳児院の職員の皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 大西薫（2010）「子どもたちはつらい未来をどう引き受けるのか：小児医療における「頑張れ」という言葉の意味」、『質的心理学研究』9(1), 25-42.
- 神長美津子（2015）「1. 展望 専門職としての保育者」、『保育学研究』53(1), 94-103.
- 厚生労働省（2020）「保育士の現状と主な取組」, 保育の現場・職業の魅力向上検討会（第5回）参考資料1.
- 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2021）「社会的養育の推進に向けて」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000784817.pdf>（最終アクセス2021年8月23日）
- 中西さやか・境愛一郎・中坪史典（2013）「子どもの「今、ここ」という視点は保育者に何をもたらすのか：保育カンファレンスでの議論に着目して」、『幼年教育研究年報』35, 45-51.
- 林悠子・森本美佐・東村知子（2012）「保育者養成校に求められる学生の資質について：保育現場へのアンケート調査より」、『奈良文化女子短期大学紀要』43, 127-134.
- 平山園子（1995）「保育カンファレンスの有効性」、『保育研究』16(3), 18-29.
- 穂高幸枝（2013）「看護師がとらえた病棟保育士の専門性とそれをとらえるきっかけとなった体験」、『日本小児看護学会誌』22(2), 89-96.
- 山田千明・林恵津子・高橋君江・石田治雄（2009）「病棟保育における保育士職の専門性」、『共栄学園短期大学研究紀要』25, 137-153.
- 山田朋子（2014）「保育者養成に関する一考察：幼保連携型認定こども園の保育教諭を視野に」、『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』46, 27-35.